

宗教的実践としての祈り

— 伝統の創造に向けて —

鈴木晋 怜

〈はじめに — 智山伝法院の研究姿勢と課題 — 〉

智山伝法院が発足して二十三年を数える。その間、本院には宗内あるいは宗外から様々な期待や批判が寄せられ、また、その存亡が問われるような紆余曲折も経験した。これまでの智山伝法院の歴史は決して平坦な道のりではなく、今に至ってもそのレーゾンデートルをめぐっては様々な意見がある。

しかし、そうした歴史の荒波に揉まれつつも、智山伝法院では本院がめざすべき研究・活動のあり方について、不断に議論を重ね、合意形成を図ってきた。そしてその要諦は、実はすでに智山伝法院の初代院長、宮坂宥勝前院長が本院の研究紀要である『現代密教』創刊号の巻頭言で提言された中に、端的に示されていたように思う。⁽¹⁾

「いま、われわれは地球上のさまざまな危機に直面し、人類の英知が改めて問い直されている。われわれの危機意識と密教とは、どのように関わるのだろうか。もしくは両者に落差があるとすれば、それはどのようにして

埋められるべきか。いずれにせよ、今、切実に求められているのは、現代と密教との対話である。われわれはそれに何を期待し、われらの時代にわれわれの密教はいかなる回答を用意し、あるいはいかなる問いかけをなし得るだろうか。われわれは現代を彩る虚飾の思想的イベントを退けて、時代の深淵をえぐる底の眼光をもつことを希求し、地道に現代に生き明日を指向する密教を模索していききたい。」

「密教の客観的な評価や賛美ではなく、実際の密教の実践体系に取り組むとき、はじめて現代に生きる密教を認識し、現代と密教との対話をおしすすめ、密教から何を学びとるかがみずからの課題となり、かくして真に主体的に密教を現代に樹立することができるのではないかと思われるのである。

約言すれば、密教のたんなる解説や解釈だけでなく、あるいは密教の評価や賛美にとどまることなく、科学技術文明の今日の時代における地球的規模での人類のさまざまな危機状況にいたるまで敏感に感知しながら、積極的に密教をいっそう主体的に学びとっていくのは、同時に歴史社会の思想的実践的要請に対して密教の立場から応えていくことにほかならない」

(太字筆者)

ここに指摘されているように、われわれの志向する研究とは、単なる密教の解説や解釈や評価や賛美ではない。そうではなく、現代という時代と対話しながら、主体的に密教を学び、実践し、その世界を生きようとする営みから生みだされる、まさに「生きる密教」の研究である。

こうした研究姿勢のもと、智山伝法院では、発足以来、『真言密教の現代化』という総合テーマのもとで研究を進めてきたが、その過程で次のようなことが浮かび上がってきた。

① 現代は未だ近代の延長線上にあると位置づけることができる。
② その近代社会の中心をなしていた価値観は、人類に多くの幸福をもたらしたが、今に至ってかなり閉塞化し、行き詰まっている。

③ 「現代化」とは「近代の延長としての現代」を批判し、超克（相対化）することによってもたらされる。

④ 「真言密教の現代化」とは、真言密教を近代的価値観に拘束されない視点（普遍化された視点）から解釈しなおし、さらにそのような視点から解釈された真言密教によって「近代の延長としての現代」を打開していくことである。

すなわち、われわれは今まさに時代の転換期を生きしており、近代の様々な歪み、あるいは行き詰まりを、どう打開していくか、また、どのような新しい世界観・人間観を構築していくかということが問われているのである。端的に言って、現代のわれわれの社会における中心的な価値観とは、科学的合理主義およびそれに基づく科学技術万能主義、そして経済至上主義、さらには人間中心主義であろう。科学はわれわれの生活を格段に便利にし、様々なことを可能にし、圧倒的な説得力をもって未知なる世界を解明した。また、高度な経済の発達は、われわれのまわりにモノをあふれさせ、生活に物質的な潤いを与え、豊かな生活を実現させた。そして、人間中心主義は、ヒューマニズムという美しい名のもとに、様々な差別や抑圧から人々を解放し、多くの人権を獲得させた。科学も経済も人間中心主義も確実に恩恵をもたらし、われわれは、むさぼるようにそれを享受したのである。

しかし、その一方で、われわれ自身、あるいはわれわれをとりまく状況は着実にかつ致命的に蝕まれていった。

科学は神秘を躰わにし、人間から敬虔さや畏れを奪った。経済は欲望を煽り、われわれは慎ましきや充足感を喪失した。そして、人間は、自然と対峙し、それを自らの支配下に貶めようと企み、われわれは、かけがえのない環境や多くの動植物を失った。

科学も経済もヒューマニズムも、われわれにとって、この上ない福音であったと同時に、それらはあたかも麻薬のようにわれわれの体を精神を、さらには地球全体を蝕んでいったのである。

そうした時代背景あるいは社会状況の中にあつて、真言密教は、そしてその教えを体現する僧侶はどのような役割をもつのであろうか。なにを期待されているのだろうか。時代・社会が大きく転換していく今、もう一度考え直した問題について考えてみる必要があるだろう。そして、それは、やたらと扇情的に危機感を煽って、宗教に引き入れるというような、あざとい仕方ではなく、極めて冷静にかつ慎重に過去を検証し、未来を展望するという姿勢が要求されるのである。

このような共通認識のもと、われわれはまず近代の主要な価値観を問い直し、その上で近代的価値観によって捨象されようとしていたもの、例えば、呪術・習俗・儀礼・身体・欲望といったもののこの時代における価値を、もう一度、認識し直すことによつて、行き詰まった近代を打開しようとしてきた。そしてそれは単に近代以前に回歸することではなく、前時代の価値を含みながら、さらにそれを超えて新しい価値観を構築していかうという試みであつた。その成果は、『現代密教』『伝法院選書』『智山教化資料』などに報告されている。

しかし、これまでの研究は、主に理念的・思想的な面からのアプローチであり、それが現代社会のなかに、どのように具体的な実践として展開され得るかということについては、必ずしも十分な提示がなされなかつた。これまでの伝法院の研究に対する宗内からの批判の多くも、主にこの点にあり、従つてそうした批判に答えていく

ためには、これまでに蓄積された理念的・思想的な研究成果を踏まえつつ、それをどう具体的な実践として現代社会の中に展開していくかということが今後の伝法院に問われていると言えよう。

〈二種の実践体系〉

前述のように、真言密教がまさに「生きる密教」として時代の要請に答えていくためには、単に理念的な価値観・世界観を提示していくのみに止まることなく、それに基づいた具体的な実践体系を現代社会の中に展開していくことが不可欠であり、それがあつて初めて真言密教の現代化がもたらされる。

もとより、真言宗の開祖である空海が多くの人たちを惹きつけた最大の理由は、それが単に教義や思想の枠に止まらず、きわめて優れた実践性・実効性があったということである。たとえば、空海が若き日の山林修行さらには入唐して密教の加持祈祷の修法を身につけたことによって、呪術的な力を獲得し、それによって様々な現象を引き起こしたという伝承は、科学的合理主義に洗脳された現代人からすると、俄には信じがたいことであるが、おそらくそれらは本当に起こったのであり、当時の人たちは、それを目の当たりにしたからこそ、空海に惹きつけられていったのである。また空海自身も、自分が身につけたその力、それは単に呪術的な力を獲得したということではなく、宇宙の森羅万象と一体化できたという確信ともいえるべきものを源泉として、それを思想的に昇華させて即身成仏の理論を打ち立てていったのではないだろうか。そのように考えるならば、真言密教の本質は、まさにその実践性・実効性にこそある。空海の即身成仏の教えの優越性は、その思想的価値もさることながら、むしろその実践的効果、さらにはそれを基盤とした社会的展開にあるのであり、現代社会においても、宗祖の流れを汲むわれわれは常にこの実践性を問うていかなければならない。謂わば真言密教の臨床的な効果についての

工夫・検証は不可欠なのである。

そして、この実践性・実効性を現代社会に体系的に展開していくためには、次の二つの面からのアプローチが必要である。

①自分自身の内に展開される実践体系 …… 三密行・観法・瞑想など

これは自身の内面的開発かいはつのためになされる実践体系で、救い・安心・悟りなどを目的として実践されていく。現代的に言えば、いわゆるスピリチュアリティに関わる実践体系である。

②社会に展開していく実践体系 …… 社会活動・社会運動・NPO／NGO活動・ボランティアなど

これは社会的開発かいはつのためになされる実践体系で、寺院を出て積極的に社会の諸問題に取り組み、社会を変革していくことを目的として実践されていく。現代的に言えば、いわゆるエンゲイジド・ブッディズムと言われている実践体系である。

この二種の実践体系は、それぞれ単独に独立して機能するものではなく、両方が連動しながら展開されていく。すなわち、内面的開発のない者による社会的開発はあり得ないし、内面的開発がなされれば、その人は必然的に社会的開発に向かう。

また、一つの行為の中に、①と②を同時に内包する宗教的実践もある。すなわち、内面的実践でありながら、その効果が自己を超えてひろく他者にあるいは社会に影響を及ぼしていくという実践である。「祈り」という宗

教行為は、まさにそれに当てはまる。

〈宗教的实践としての祈り〉

—人間にとっての祈り—

日本人の宗教意識についての調査によれば、特定の宗教に対する信仰をもっている日本人は、概ね二割から三割程度である。⁽²⁾従って、七割から八割の日本人は、自覚的な信仰をもっていないことになる。しかし、だからと言って、まったく宗教とは無縁であるかと言えは、決してそうではなく、多くの日本人は折に触れて、神や仏に祈っている。たとえば、毎年、正月になると初詣に参り、神仏に家内安全・商売繁盛・学業成就などを祈る。お盆やお彼岸になると、墓参りをする。また、スポーツの応援で手を合わせて一心に勝利を祈る姿は、よく目にする光景である。特に宗教を意識していなくとも日本人は、さまざまな場面で祈っている。

もちろん、われわれ僧侶も祈る。一日の始まりは、朝の勤行から始まるし、良くも悪くも、われわれの活動の大きなウエイトを占めているのは、葬儀や法事で拜む、すなわち祈ることである。宗教者の会議などでも、かならず法楽で始まり、法楽で終わる。祈りなしに、われわれ僧侶の生活は成り立たないと言っても過言ではない。

なぜ、人は祈るのだろうか。そこに特定の宗教が介在するかしないかは関わりなく、また、今も昔も、人は祈らずにはいられない。

この問いについて考える手がかりとして、まず、「いのり」の語源について考えてみたい。日本語の「いのり」の語源については未だ定説がある訳ではないが、諸説に共通していることは、「いのり」とは「い」+「のり」という語構成からなっているということである。それではその「い」と「のり」をどう捉えるかであるが、「い」

を「生命（霊）力」、「のり」を祝詞のりとや詔みことのりの「のり」と同じで、神聖な言葉や祝言を「宣る（宣言する）」とする説が有力である。すなわち「いのり」とは「生宣り」であり、「生命の宣言」と捉えることができるのである。⁽³⁾

この祈りの語義解釈に従えば、祈りとは、まさに人間が生きんとする欲求そのものであり、人が生きようとす
る限り、必然的に祈らざるを得ない。その意味において、祈りとは謂わば本能のようなものでもあろう。こうし
た祈りの有り様について、那須政隆師は、次のように述べている。⁽⁴⁾

すべて生命的欲求が満足し得る間は可いが、欲求が希望通り満たされなかつたり、欲求が阻止されたりすると、
欲求は一層強くなり、やがて深刻の極点に窮し、そこで欲求が「祈り」の形に変わる。この場合、もし「祈り」
に転じないならば、その人は欲求の切実さに窮して欲求を放棄するであらう。欲求の放棄は、自暴自棄か、或は
自殺かである。それはつまり生命の欲求に追いつめられて、窒息したものである。しかるに「祈り」は、こうし
た窒息から人類を救い、新しい意欲に生き甲斐を感じしむるものである。病気の平癒を祈るのも、家運の長久を
祈るのも、また交通の安全を祈るのも、それらの祈りはすべて生命的欲求の必然なる発露である。

また宗教哲学者の棚次正和は、祈りについて精緻に研究した上で、こう述べている。⁽⁵⁾

こうして「ここで今」息をしながら生きているということ、この当たり前の実存的事実がもつ不思議を素直に
受け止めることから、すべてが始まるのではなからうか。息をすることが生きることであり、またそれが祈るこ
とであるということに気づいている人は、案外少ないかもしれない。しかし、「いき」をすることや「いきる」

ことや「いのる」ことが、「い」という生命エネルギーの宇宙規模の循環に関わる事柄であることを、日本人はほとんど無意識の言語感覚で捉えているようにも思う。

このように人は、まるで無意識のうちに息をするかのように、自らの生命的欲求の発露として祈り続けてきた。祈りとはまさに自分が生きていることの証でもあったのだ。

— 祈りの効果 —

さらに人が祈り続けてきたもう一つの大きな理由として、「祈りの効果」ということが考えられる。たとえば、祈りがわれわれの生命の宣言だとしても、そこに何らかの効果がなければ、果たして、このように人種を越え、文化を越え、時代を越え、人々は祈り続けられるだろうか。

祈りの効果については、近年、科学的な手法に則って、多くの報告がなされている。ハーバード大学、コロンビア大学、デューク大学といった権威のある大学で、祈りの効果について1200を超える研究が行われ、その効果が報告されている。例えば、アメリカの医学博士 ラリー・ドッシーは自著の中で次のようなケースを紹介している。⁽⁶⁾

心臓病の専門医ランドルフ・バードが、サンフランシスコ総合病院の心臓病集中病棟の患者三九三名の協力を得て行った一九八八年の研究では、米国内のさまざまな場所にいるキリスト教信者の集団が、指定された病人たちのグループのひとりひとりに対して祈りを行った。一方、コントロール群の患者たちには誰も祈らなかった。

そして、祈りという要因を除いて、すべての患者は同じハイテクな治療を受けた。これは二重盲検法による研究であった。つまり、患者、医師、看護婦のすべてが、誰が祈られ、誰が祈られていないかわからないように配慮されていた。

その結果バードは、祈られた患者の方が、いくつかの測定の結果、統計学的にみて明らかに良くなっていることに気づいた。そこでは祈りの距離というものは、祈りの効果を左右する要因とはならなかった。東海岸側からの祈りも、西海岸にあるこの病院に近いグループからの祈りとまったく同様に効果的だったことがわかった。

このケースから祈りの効果について次のようなことがわかる。

①病気の症状を改善するという効果が祈りにはあり、そしてそれはいわゆるプラシーボ効果とは異なる。

プラシーボ効果とはいわゆる偽薬効果と呼ばれるもので、乳糖の錠剤や生理食塩水の注射のように実際には症状の改善に関係のない処方をした時にでも、患者の信念、期待感、暗示、積極的思考などによって、それが効果を現すというものである。祈りに関連づけて言えば、たとえば、小さい子供が転んで泣いているとき、お母さんが「チチンブイブイ、痛い痛い飛んでいけー」とおまじないをすると、不思議と痛みがおさまり、ピタッと泣き止むという場合、これは子供がお母さんに対して絶大な信頼感・期待感をもっていたが故にお母さんのおまじないが効果を発揮したのであり、これはプラシーボ効果と言える。祈りの効果には、もちろんこのプラシーボ効果が寄与する場合もあるが、しかし、このケースの場合のように、祈りを受ける側の人が、誰かに祈られているということを知らなくても、他者への祈りというものが効いたという事例は数多く報告されている。

② 祈りの効果は、距離の遠近に関係がない。

このケースと同様、別の研究でも、近距離と遠距離のそれぞれから行った祈りで、微生物の成長率に祈りの力がどれだけ影響を与えたかが比較されたが、距離の遠近は、影響力の差の要因にはならなかった。

③ 祈りの効果は、覆って遮断したり、封鎖したりすることができない。

祈りについての一般的なイメージは、「祈りが届く」という表現にもあるように、ある特定の場所へ送り届けられる、すなわち、電話やテレビのように光ファイバー・ケーブルや軌道上の衛星や中継基地によって伝達されるという感じがある。従って、その軌道が閉じられれば、届かないということになるが、実際の祈りは、遠く離れたどこかの場所に祈りのメッセージが送り届けられるということではない。いかなる遮蔽物があるうと経路が閉ざされていようと祈りは効果を發揮する。

④ したがって祈りの効果は、祈る者から祈られる者に向けて物理的なエネルギーが送られているわけではない。

何らかの物理的なエネルギーが送られているのであれば、遠距離より近距離の方が祈りの力はパワフルになるはずだし、また実際、他の実験によれば、祈る側と祈られる側からいかなるエネルギーも検出されることはなかった。

他の多くの祈りの効果についての研究からも、同じようなイメージをみることができ。つまり、祈りの効果とは、何かしらの物理的なエネルギーが働きかけることよって事態を変化させるといったものではないのである。そうではなく、しかし、祈りは実際に効くのである。

現在の科学では、なぜ、祈りがこうした効果をもつのかということに関しては解明されていない。しかし、ラリー・ドッシーの同書の中で、量子物理学の興味深い概念が紹介されている。⁽⁷⁾

物質世界の最小の次元を扱う量子物理学においては、過去四半世紀のあいだに行われたいくつかの実験で、「非局在的」事象と呼ばれるものの実在が明らかにされてきた。このことを簡単に説明すると次のようになる。

もし、接触していた二つの素粒子が分離したとき、片方の素粒子における変化は、もう一方の素粒子の変化と相互に関係しあう。これは、どれだけそれらの距離が離れていようが関係なく、まったく同時に、同じ度合いでおこる。互いの距離が離れたところでおこった事象の性質を、「非局在的」と呼ぶ。

非局在的事象には、三つの共通する特徴がある。(一) 非媒介的(距離の変化は、エネルギーの伝達にも、いかなる種類のエネルギー的な兆候にも影響しない)、(二) 非軽減的(変化の強さは、距離が増加しても弱まることがない)、(三) 即時的(遠隔地間の変化は、まったく同時におこる)。

祈りの効果は、確かにこの非局在的事象によく似ている。しかし、こうした科学的な説明は、起きている現象の観察であり、どうしてそのような現象が起きるかという説明にはなっていない。今の科学では、なぜ祈りが効くのかということに関しては無知である。

科学では説明がつかない事実を前にして、現代人はともすれば、その事実自体を疑ってしまう傾向があるが、少なくともわれわれ宗教に関わる者は、自信をもって、そこに神・仏の存在を感じ、その世界に自らもつながっていると実感する必要があるのではないだろうか。

いかなる宗教でも必ず祈りの儀式がある。それは宗教の枠を超えて、祈りの効用が人類に普遍的に意識されていたからに違いない。教義だけで人を救済することは、いかなる宗教でもできなかったはずである。

— 宗教と祈り —

祈りとは、人間である以上、誰もがもっている生命的欲求の発露であり、またそれは、人間が個を超えた大きなつながりの中で生きていることを実感させてくれるものである。換言すれば、祈りとは、人間が自分の内や外に存在する「サムシング・グレート（偉大な何ものか）」に向かつて語りかけるコミュニケーションとも言えよう。一人一人の人間は個として独立していても、実はその存在は他のあらゆる人びと、さらには宇宙のあらゆる現象とつながっているのだ。そしてわれわれが祈ることによって、そのつながりに何らかの作用を及ぼして、今度はそこから個に大きな力が働くのである。祈りとは、まさに個である人間一人一人とそれを含みながらそれを超えた「サムシング・グレート」をつなぐ架け橋でもある。そしてその「サムシング・グレート」を宗教では、神と言ひ、仏と言ひ、あるいは大いなる命というのである。

この意味において、宗教的实践としての祈りとは、一つの行為の中に自分自身の内面に向かう実践と、社会に向かう実践とを同時に含んでいるものと言える。たとえ、寺に籠もり、一人で祈っていたとしても、それは世界のあらゆるものとのつながり、また、確かな力を世界に及ぼしているからである。だからこそわれわれは、このことをきちんと自覚した上で祈らなければならない。自分勝手な祈りは、自分の中だけで完結するのではなく、自分とつながっているすべてのものに影響を及ぼすからである。利己的な祈りは、自分のみならず、あらゆるものを歪めてしまう。自己を見つめ、自己の有り様、すなわち私はあらゆるものと根源的に結びついているという自覚なしに、ただ神仏に頼って、その力を借りて自己を充足させていこうとする利己的な祈りは、たとえそれが一時的に叶ったとしても、そのことを契機に神仏に対する敬虔さや他者に対する謙虚さをもたなければ、人をさらなる苦の連鎖へと貶めてしまうのである。

私の生命的欲求は、宇宙全体の生命的欲求でもあることを自覚し、その総体に自己投棄することによって、その祈りは、自らをさらにはあらゆるものを救いへと向かわせるのではないだろうか。

われわれ宗教者のアイデンティティは、祈ることにこそある。祈りのない宗教生活は成り立たない。それぞれの宗団はそれぞれの仕方ですり続けてきた。宗団の伝統は祈りの伝統でもある。僧侶の所作にも、言葉にも、そして瞑想の中にも、その一つ一つに、深い祈りが込められているはずである。しかしわれわれは今だけ確信をもって、またどれだけ真摯にひたむきに祈り続けているだろうか。ただ形式を追い、技巧を求め、論理に走っている傾向がありはしないだろうか。

冒頭にも述べたとおり、今、われわれには、近代の様々な歪み、あるいは行き詰まりを、どう打開していくか、また、どのような新しい世界観・人間観を構築していくかということが問われている。そして、それを単なる理念ではなく、具体的な実践として現代社会の中に展開していくことが求められている。その課題に因應するために、「祈り」という視点から、本宗の教相・事相・教化を捉え直していく必要があるのではないだろうか。それはまさに伝統に回帰しつつ、新たな伝統を創造していく営みでもあるのだ。

註

- (1) 『現代密教創刊号 卷頭言』 宮坂宥勝 ※太線筆者
- (2) 『データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版』 石井研士著 新曜社 参照
- (3) 『宗教の根源 — 祈りの人間論序説 —』 棚次正和著 世界思想社 第一章参照
- (4) 『那須政隆宛下講話集』 成田山福祉教化研究会編 二十三頁
- (5) 『宗教の根源 — 祈りの人間論序説 —』 棚次正和著 世界思想社 三三三頁
- (6) 『祈る心は、治る心』 ラリー・ドゥシー著 大塚晃志郎訳 日本教文社 三十四頁 尚、祈りの効果についての科学的研究については、同書原註の中で紹介されている。
- (7) 同書 三十七頁

〈キーワード〉密教の現代化・二種の実践体系・祈り